

徳島大学病院がん診療連携センターフォーラム

「徳島大学病院がん診療連携センターフォーラム」が1月10日、徳島市の徳島大学病院で開かれた。「知って納得!! 徳島県のがん治療」と題し、同病院の医師ら7人が講演。高齢者やAYA世代(思春期や若年成人)の治療、がん遺伝子検査などの現状を報告した。講演の要旨を紹介する。(滝本昇)

治療とQOL 両立

開会あいさつ

西村センター長



がん治療を安心して受けるのに大変なことになるプログラムの構成した。徳島大学病院がん相談支援センターでは、治療におけるさまざまな相談事を受ける準備をしている。他院で治療している患者、家族でも相談が可能なので、ぜひ気軽に利用してほしい。

フォーラム出席者

- 西村 正人氏 (がん診療連携センター長)
- 山本 由理氏 (産科婦人科医師)
- 岡村 和美氏 (小児科医師)
- 岡本 恵氏 (看護師)
- 岡田 泰行氏 (消化器内科医師)
- 青田 桂子氏 (口腔内科医師)
- 高田 香氏 (歯科麻酔科医師)
- 近藤 佳那氏 (がん診療連携センター医療ソーシャルワーカー)

希少例対処へ連携強化 岡村氏



AYA世代とは思春期、若年成人を指す言葉で、おおむね15歳から39歳。がん患者のうち、小児は0.2%、AYA世代は2.1%と少なく、あまり認知されていないのが現状だ。AYA世代のがんは小児期および成人期に多いものを含み、小児期に特徴的な疾患は小児科で診療している。

AYA世代のがんが抱える問題は多く存在する。就学、就職、結婚などさまざまなライフイベントに直面する時期であり、また病気自体も化学療法に抵抗性を示すなどの特徴から、治療成績は他の世代と比較してあまり向上していない。専門家が少なく、治療法が十分確立されていない疾患も多いため、小児やAYA世代のがんは希少疾患が多い。一つの病院で経験できる症例数には限りがあり、どの

小児・AYA世代のがん診療への取り組み

今後取り組みべき課題の一つとして晩期合併症がある。治療後数年を経て、その病気自体や治療の影響で生じる合併症だ。海外での報告では、30年後には約70%の患者が晩期合併症を抱えている。国内では本年度から、小児がんを扱う国内約150施設が共同して患者のデータベース作成に取り掛かっている。現在、合併症のフォローは小児科診療の一環として行っているが、成人期に入ると年齢によってさらに複雑になる。ライフステージに合わせ、小児科・成人診療科の双方で、生涯にわたる患者が抱える問題に取り組んでいく必要がある。

「分子標的」新薬次々と岡田氏



がんには、たくさんの遺伝子変異が関わっている。正常組織のある遺伝子変異として前がん病変になり、さらに別の遺伝子の変異が加わってがんになり、さらに別の遺伝子変異が加わって転移する多段階がんモデルが提唱されている。同じがんの人でも、全ての遺伝子変異が同じではない。大腸がんの人が100人いれば、100通りの遺伝子変異のパターンがある。

胃がん、大腸がんなど、各臓器でどのような遺伝子の変異があるのかは解明されている。その遺伝子に対する薬として「分子標的薬」が開発され、実臨床でも年々使用できる薬が増えている。従来の抗がん剤は正常な細胞も攻撃する副作用が出る。一方、遺伝子をターゲットとした分子標的薬は、がん細胞を狙って攻撃できる。

がん遺伝子検査について

現在、胃、大腸、肺などがんを診断された臓器ごとに治療を行っているが、遺伝子を調べることによって、臓器にかかわらず遺伝子に対する治療が行われる未来が近づいている。

薬剤減らし効果的鎮痛 高田氏



がんによる痛みは我慢せず、身近な医療関係者に遠慮なく伝えてほしい。どこが痛むか、いつ頃から始まったか、どんな痛みか。痛みの表現は難しいが、締め付けられるような、電気が走るような、ズキズキ、ジンジン、チクチク、ビリビリなど、自由に表現してほしい。このような情報と、画像検査などの情報から痛みを分類して治療方法を定める。

治療としては、まず消炎鎮痛薬やモルヒネなどの医療用麻薬の内服から始める。神経障害性疼痛、いわゆる神経痛が含まれていると考えられる場合は、鎮痛補助薬を併用する。

痛みと神経ブロックについて

これらの薬物療法では十分に痛みが取れなかったり、副作用のために増量が難しくなったりした場合は、神経ブロックを含めた他の鎮痛方法を検討する。

将来妊娠の可能性残す 山本氏



がん生殖医療は、妊産婦温存治療とも呼ばれる。若年がん患者や免疫疾患の患者に対する治療によって将来妊娠する可能性が消失しないようにし、将来の選択肢を残すのが目的だ。

抗がん剤治療は、卵巣に影響が出る可能性がある。一時的に月経不順になったり月経が止まったりする。大きいのは、卵巣の中にいる原始卵胞への影響だ。原始卵胞は、女性が生まれたときから増えることはいらない。年々減っていく、少なくなると閉経する。抗がん剤治療で原始卵胞に傷がついて細胞死が起きたり、過剰に活性化したりして卵胞が退縮すると卵子の数が減る。たくさん減ると早期に閉経し、がん治療が終わった後に妊娠が難しくなることがある。骨盤部への放射線治療も、子宮や卵巣に影響が出る。放射線

がん生殖医療について

がん生殖医療は、妊産婦温存治療とも呼ばれる。若年がん患者や免疫疾患の患者に対する治療によって将来妊娠する可能性が消失しないようにし、将来の選択肢を残すのが目的だ。

体力考慮し支持療法も岡本氏



高齢者のがん治療の考え方として、患者が治療に耐えられるか、回復して健康を取り戻せるかを判断する。

医師はさまざまな検査所見、状況などを参考に治療方針を決める。患者が▽日常生活で身の回りのことが自分でできているか▽同年齢の健康な人と同じように歩き、同じように階段を上れるか、体力はあるか▽病気の治療に関する説明についての理解力が十分か、などを基にする。

高齢者のがん治療について

主な治療は手術療法、放射線療法、薬物療法。患者の状態を総合的に把握した上で「標準治療」が実施できないかを判断する。

口内炎や菌性感染抑制 青田氏



がんの全身麻酔手術では口内から気管にチューブを入れて人工呼吸を行う。この際に口内や咽頭部の細菌が気道に侵入する。全身麻酔時は絶食、唾液分泌の低下、嚥下機能の低下、歯磨きができないことにより細菌が増え、誤嚥性肺炎のリスクが高くなる。

抗がん剤治療での口内トラブルとして最も多いのが口腔粘膜炎、いわゆる口内炎。発症頻度は40~70%に上る。抗がん剤投与後10~12日頃に症状のピークを迎える。現時点で発症を抑える方法はないので、疼痛緩和と、それ以上ひどくならないための二次感染の予防を重視する。

がん治療をサポートする口腔ケア

がん治療をサポートする口腔ケアの方法はないので、疼痛緩和と、それ以上ひどくならないための二次感染の予防を重視する。

全ての悩み窓口で対応 近藤氏



仕事に関する相談も受ける。徳島大学病院では偶数月の第2、第4火曜、奇数月の第4火曜に、社会保険労務士の相談ができる。

仕事に関する相談も受ける。徳島大学病院では偶数月の第2、第4火曜、奇数月の第4火曜に、社会保険労務士の相談ができる。

がん相談支援センターについて

全国では、質の高い専門的ながん治療が提供できる「がん拠点病院」が指定されており、がん相談支援センターが設置されている。がんに関する全ての相談窓口で、誰でも無料、匿名で相談できる。県内では徳島大学病院、県立中央病院、徳島市民病院、県立三好病院、徳島赤十字病院がある。阿南医療センターにも窓口が設けられている。